

「経営と人事」と「さとりと修行」

今回は「経営と人事」と「さとりと修行」というテーマで論稿を執筆させていただきます。私自身住職として宗教法人見性院の運営を任されて13年の歳月が過ぎ去りました。その間様々な出来事に遭遇し、代表としてまた一経営者として紆余曲折の日々を過ごしてきました。艱難辛苦（かんなんしんく）の日々と言っても過言ではなかったかと述懐しています。また同時に貴重な経験の数々、一般人ではとても体験ができない最高の人生と言えるようなこともあまたにあったかと記憶をしております。

寺院の規模としては先代の頃と比較した場合にはおよそ5倍です。現在の職員数は雇用契約者だけで15人、その他囑託の僧侶を入れると20人規模です。これまで雇用させていただいた従業員は50人くらいかと推測が出来ます。よく経営には専門性の他に哲学が必要だと言われます。それは間違いありません。それを一言で「経営哲学」と称されます。それを十分承知の上で私はあえて経営とは人事だと思っております。私の造語「経営人事」。経営とは最終的には人事ですべてが決まるという意味です。経営者次第とも言えます。経営者の人を見る目、人間性、人間洞察力、人間とは何かを知る人間学、理念と情念を兼ね備えた絶妙な人事が出来ることです。そこはAIでは到底及ばない人間力、辛苦・辛酸を舐めて長い下積みの中でしか培うことの出来ない汗と涙の結晶体と言ってもよいものかもしれません。人間の機微に通じた深い観察眼と教養、そこに裏打ちされた哲理と経験、その細部に神が宿り、天地は動いて行くものではないでしょうか。

そもそも人間とは一体何なのでしょう。私は人間とは自分を知るためにこそ人生はあるのだと考えます。他人ごとではなく自分ごとです。すべては。

私たちの開祖道元はその著「正法眼蔵」（現成公案）の中でかの有名な一節、「仏道をならふといふは自己をならふなり、自己をならふというは自己をわするなり、自己をわするるといふは万法に証せらるるなり、万法に証せらるるといふは自己の心身および他己の心身をして 脱落せしむるなり」と言われました。

仏道を修行することの意味は自己を知ることであり、そのためには自己を忘れるための修行をしろと言われます。自己を捨ててこそさとりの世界だということです。さとりの世界とは自己と他人（物）が一体化して融合し、迷いから脱落して無の境地へと誘われることだと示されます。

かの脚本家、倉本聰さんは北海道に拠点を移してさあこれからという時に大スランプに陥ったと言います。まったく執筆が出来なくなり長いトンネルから数か月は抜け出ることが出来なかったそうです。その時テレビをつけると版画家の巨匠「棟方志功の世界」という特集が放映されていたそうです。番組の中で棟方志功さんはこんなことをつぶやいたそうです。「オレは自分のこれまで作ってきた作品すべてに責任なんか持てない、なぜならこれらの作品はオレの作ってきたもんじゃなかったんだから」と。その言葉は即、当時暗闇の中で路頭に迷っていた倉本聰さんの脳裏に突き刺さったそうです。そうだこれだったんだ。私の今に必要なことはと。私のこれまでの作品も棟方さんが言われるように私が作ってきたもんじゃなかったのかもしれない。私がなにかの力を借りて天は神仏は私にこの役割を与えてくれていたのかもしれない。凄いのは偉いのは私ではなく天地であり私は天地から使命をいただいて書かせていただいたんだということを悟られたそうです。そこから倉本さんに光明が射し長いトンネルから脱却できたそうです。その後は一気に筆が運び「北の国から」というあの名作が誕生していったそうです。さとりとは自分がないことを悟り、天地・神仏によってのみ生かされているということを知ることなのではないでしょうか。

「忘己利他（もうこりた）」

かつて米国 NBA（プロバスケットボール界）にバスケットボールの神様と称された一人の天才がいました。その名を知らない人は少ないでしょう。マイケル・ジョーダンです。私はテレビでマイケル・ジョーダンの引退会見の放映を見ることが出来ました。その最後の会見での記者の質問は私にとって興味深いものでした。「最後にあなたに聞きたい。マイケル・ジョーダンあなたは NBA の神様とも言われ今や伝説の人になりつつある。あなたはこれまでバスケットボールというスポーツに対してどんな心構えで対峙をし向き合ってきたのですか。そしてあなたにとってバスケットボールとはどんな存在でしたか」と。それに対してジョーダンは「私はこれまでバスケットボールという競技に常に真摯に誠実に向き合い真面目に取り組んできました。それに対してバスケットボールは私に対して常に正直でいてくれました。コートは私に対して公平でいてくれました。それだけのことです。理屈は極めてシンプルなことだったので」と。私は会見放映後、一人の大天才の引き際の余韻にしばし酔いしれることが出来ました。

自分の人生の結果がもしあるとするならそれはすべて自分の責任であります。そして対象は神仏や天地なのかもしれません。私達は誰でも常に修行ができます。それは懺悔滅罪という修行です。自分が悪かったんだという修行です。慈悲による人を許すための修行です。これだけでも私は無量の功德を積むと信じます。修行はいつもさとりを伴います。さとりに修行は不可欠です。私が現在 55 歳にしてささやかにさとった境地を申し上げます。「少なくとも自分の人生においては必要なことしか起こらない。最善のことしか与えられない。自分の人生の責任はすべて自分にあり」です。

最後に正法眼蔵（現成公案）の一節をご紹介します。攔筆（かくひつ）とさせていただきます。

諸法の仏法なる時節、すなわち迷悟あり、修行あり、生あり死あり、諸仏あり衆生（しゅじょう）あり。万法（まんぼう）ともにわれにあらざる時節、まどひなくさととりなく、諸仏なく衆生なく、生なく滅なし。仏道もとより豊儉より跳出（ちょうしゅつ）せるゆゑに生滅あり、迷悟あり、生仏あり、しかもかくのごとくなりといえども、華は愛惜にちり、草は棄嫌におふるのみなり。

（私訳）

すべてが仏法の世界観の中にある時には、そこには迷いとさととりがあり、修行がある。生があり死がある。仏たちがあり生きとし生けるものがある。この仏法観がない時には、惑いもなければさととりもないのである。仏たちもなく生きとし生けるものもないのである。生もなく滅もなくそのこと存在自体が見えないのである。仏道の世界には元より生活の貧富などというものはなくそこからは超越しているのである。だから生とか滅があるのであり、迷いやさととりがあり、生きとし生けるものもあり、仏たちもいるのである。

このような仏法なる世界観が確立しているといっても自然に咲く花は美しく愛しく惜しみて散っていくのである。雑草は嫌悪感を持って棄てられていく。自然の道理である。

※現成公案（げんじょうこうあん）とは、私見ではありますが、現実に成立しているありのままの世界、人間界こそ公案、つまり禅問答であるという意味かと推測されます。よくよく考えてみれば、悟ってみれば「さととり」とは目の前にあった自己そのものであったということではないでしょうか。

以上

合掌
令和3年7月23日
見性院住職